「一秋」の実り 3

田宮 治

狩猟は紳士のスポーツ（狩猟の原点）

私の若かりし頃、つまり昭和三十年代は敗戦からの復興期にあり、狩猟はゴルフと並んで紳士のスポーツともてはやされていた。

まだまだ食糧難からやっと抜け出したばかりで、とても狩猟を楽しむスポーツ感にまで届いていないようだったが、狩猟免許を取ると一様に赤シャツに黒皮ベスト、腰にはガンベルト。申し合わせたようにポインターやセターを引きつれ猟野を闊歩し、「われこそは狩猟家なるぞ」と胸が張れたものである。当然のように、誰もがこの道に夢をかけ、希望をふくらませて頑張っていた。

以来五十有余年。ゴルフ界では「はにかみ王子」や一億円プレーヤーが続出、若い女子選手でさえも億の金を手にし、お茶の間の人気をかっさらっている。それぞれの世界でかける思いは異なっても皆一様に努力し、頑張ってきたであろうに、突きつけられる現実の開きは唖然とするもので、なんとも口惜しい限りである。

何事によらず、栄枯盛衰は世の常である。いちいち文句を言っても仕方のないことで、批判したり後悔したところで何の役にも立たない。それよりは、好きでやりはじめて一生懸命にやってきたのであるから、右肩下がりの狩猟界を何とか立て直したいものである。

「生きるための狩猟」から「趣味の狩猟」に変わっていく中で、毛皮で稼ぐ必要もなくなったことで猟野にはキツネやテン、イタチなどが激増し、せっかくの放鳥も焼け石に水の状況となっている。

そんな状況では、ヤマドリの棲み家も奥山だけに残る種鳥のような存在となり、さしたる被害も及ぼさなくなってきている。そのうちにメスだけではなく、オスも撃てなくなるような気がする。

キジにしたって、あれほど美しい鳥がこんなに少なくなったのでは、撃てなくなって当然なようなものである。どんなに頑張って良い犬を作ったとしても、なんとなく不安になるのは私だけであろうか。

生きるための狩猟から紳士のスポーツへと狩猟形態がどんなに変わったとしても、目的の獲物がいなくなったのでは楽しむどころではない。一日歩き回っても鳥一羽の出会いがないようでは、犬の訓練や狩猟技術の向上どころではなく、狩猟そのものまでも見直すことが当たり前である。誰もが厳しい現実に立ち、「自分は何をもって狩猟となすか」をよくよく考えて狩猟計画を立て直し、目の前の難関を一つ一つ確実に乗り越えていくべき時である。

勇気の決断

私の生国は雪国新潟でも最北の山村である。その昔、「日本武尊（やまとたける）／倭健命（みこと）」が勅命で蝦夷征伐に向かう折にこの山の頂上で、あまりの絶景に感銘して、「ああここも日本国である」と名付けたという伝説の名山「日本国（にほんこく）」の山麓に広がる小さな村、小俣（おまた）が人生の出発点である。何もない村ではあるが、人知れず残っている縄文杉にも匹敵する白山神社の「大杉神木」と、起死回生の妙手はないようだが、せめて自分の守備範囲だけでも確実に守り、行く先の礎となりたいものである。

今や狩猟界を取り巻く状況は大変なもので、自然破壊は進み、鳥獣の生態系にも大きな影響を引き起こしている。特にキジ、ヤマドリ、コジュケイまでも激減し、鳥猟の将来に暗雲がただよってい

山熊田地区で続けられている「熊祭り」は今もってなかなか盛況で、秋田マタギと並び新潟マタギの集落でもある。

ちなみに、何年か前にNHKで「熊の生態」という三十分の特番が放映された。この村落の学校で校長をやっていた満兄は、当然のようにその製作に協力した。

狩猟をこよなく愛していた兄が教えた猟人もたくさん育っているが、その一人が私である。小学三年生頃から兄たちの後を追って、「猟のなんたるか」をたたきこまれたようである。

父から受け継いだ狩猟は、当時、この地で生きるための大切なもので、楽しむような生やさしいものではなかった。何もない山村だが、ありあまる大自然は生活の大切なもので、利用できる物は何でも取り入れ生活してきたのである。

生家は農業で米だけは十分あったが、雪深いこの地ではそれだけでは生きていけない。当然のように、秋がくれば狩猟で一家を守ってきたのである。

小学生ともなればどの家でも働き手であり、子供をおんぶして学校に来るなどは当たり前で、忙しいを理由に休むのも当然のことになっていた。

そんな中で、私も五年生くらいになると農作業はいうに及ばず馬も川で洗っていたし、豚や羊、当然犬も含め兄弟で世話をしていた。どんなに不満があろうと、文句など言おうものなら雷が落ち、ゲンコツがとんできた。

なにしろ十二人兄弟の八男ともなると、どの兄でも恐しいほど強い。すぐ上の一巳兄にだって奇襲攻撃以外勝つ手段はないが、しかし勝ったら最後、しばらくの間、山遊びにも川遊びもおあずけである。それが一番困ることであったが、家族の大切な絆は、こんなところから生まれたようで、山での狩猟はそんな絆をどんどん成長させ究めていったようである。

父は口癖のように「治や、踏まれた草さえ時期見て開くって……ね」「我慢が一番、お前にはそれが足りない」と、だだをこね出すと手に負えない私をいつも諭してくれていた。今もって、我慢が足りなくて、言い出したら絶対に引かないところは直らないが、それでもこの頃にたたき込まれた「狩猟魂」と「愛犬にかける思い」はますます元気である。

最近になって私の生国は村上市になったが、当時は駅まで八キロの道はひどいものでバスも通らず、その上雪深い山里である。そのためか手つかずの自然、尺イワナやアユ、秋には鮭までものぼり来る清流と美しい宝の山々である。

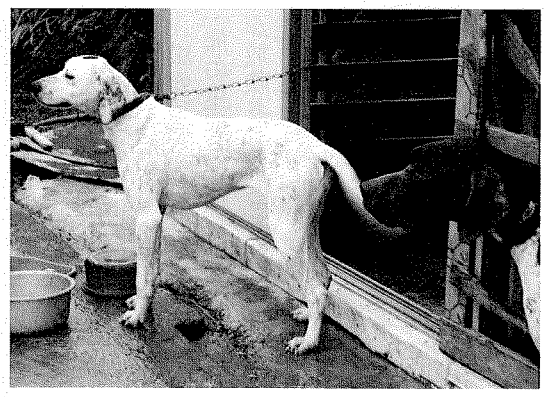
そんな山々をわが家だけで狩るのである。たまに隣村のハンターも来るが、一人占めのような、すべてを知り尽くした猟場である。雪が来る前がまさに勝負の稼ぎ時で、テンやイタチの皮を求め山全体をくまなく歩くのであるが、そのついでにやるのが私の一番好きな本来の狩猟、つまりヤマドリ猟であり、ウサギ猟だった。

テンやイタチは罠猟で、三日おきに見回る。近い所は毎朝見回りながらのヤマドリ猟だったが、当時はどの小沢でも群鳥が付いていて、夢のような猟場であった。

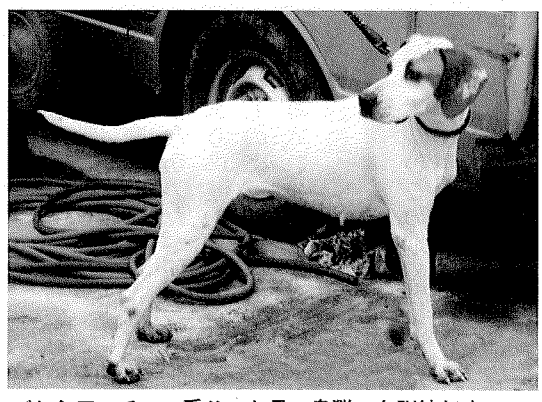
冬休みに入ると決まったように毎日ウサギ追いである。どの山でも雪の上にウサギが踏み固めたウサギ道ができていて、何羽も飛び出したものである。ウサギは愛犬を少し待つだけで必ず飛び出し、一日に何羽もゲットできた。小さな私など重くて困ったものである。

以来、どの県に行っても、こんなに良い狩場はなかったし、なつかしく思い出している。ただ、雪が多いためかキジやコジュケイ、鹿、猪などはいなく、大物では熊以外いないのであるから、父や兄の熊にかける思いは大変なもので、狩猟の夢のような存在であった。

今流でいうならば、こんな素晴らしい大自然の中で、狩猟の英才教育を受けていたことになる。しかも、それは「いつも生きるための真剣勝負」である。何事を学ぶのもこの山村で生きていくためのものだったから、生半可なものではない。徹底的にたたき込まれたようだが、不思議と苦しいとか嫌になって逃げ出そうとは一度も思

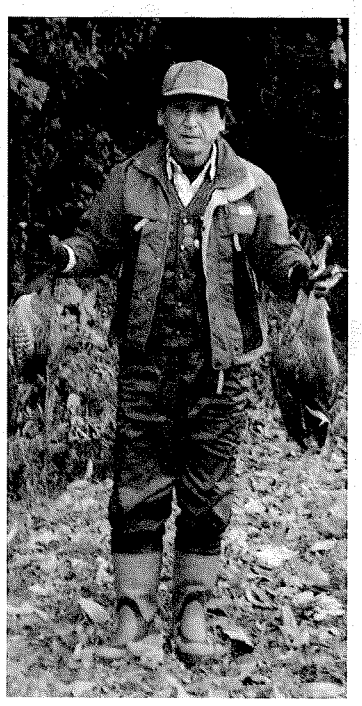


マーヤ号とジャック号。良い仔たちだった



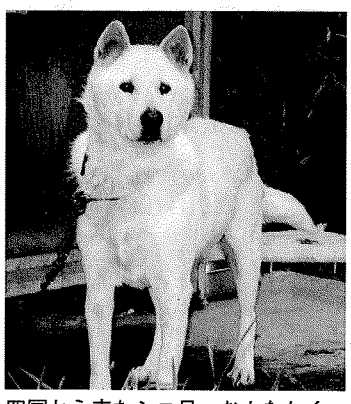
バレシア・チーフ系サーヤ号。鳥猟でも訓練がすべてである

バロウビュー直仔のジョウ号。キジ猟でも、ヤマドリ猟でもポイントとラウンド芸が上手だった。今もってヤマドリ猟ならばの自信はある。全猟に犬舎名「キングアンドクイーン」を登録し、鳥猟を楽しんでいた



まだまだ、カモ猟でもこのとおり

ゴン助号（つるぎ犬舎）孫の咲号。強すぎるのが玉にキズだった



四国から来たシロ号。おとなしく、猪には強かった。数少ない紀州の名犬だった（四国犬が入っていたかも）

ったことがない。

それどころか、どんどんのめりこみ、猟キチ、犬キチになってしまった。そして何年か前になるが、何度出猟しても出会いがなく成果もない鳥猟に見切りをつけて、大物猟に転換すべく決断したのである。

猪の単独猟、猪犬作りの野望

もうかれこれ二十五年くらい前になるが、五頭いたポインターとセターの中に紀州犬の牡牝を仕入れたのである。鳥犬は本誌のお陰で飼う犬みなそこそこの犬になったが、どう頑張っても紀州犬はだめであった。飽きも懲りもせず、それこそ全国の有名人から大金を出し数えきれない血統書付きの仔犬や成犬までも手に入れ、若い力で頑張ったが、どうしても理想の猪猟どころか、思いどおりの猪猟犬はできなかった。

猪猟への期待とは裏腹に、猪や鹿の全くいない地で育ったための失敗や、猪の習性を知らないための挫折で、誰にも負けない遠回りをして頑張り通してきたのである。そのお陰で猪猟でも猪犬観でも十分に理解できるまでになった。

失敗や挫折による貴重な実戦体験は、誰も真似のできない、「俺流の猪猟の方法」や、自分の猟法にぴったり合った「自作の猪犬群」を完成したことになる。

今でこそ、猪犬は猪に行くのが当然で、単独猟人と名乗るからには猪など獲れて当たり前になっている。大物猟を始めた当時は誰一人教えてくれる訳でもなく、生国でたたきこまれたウサギ猟を前面に押し出して、来る日もくる日も山に出て大物を追っかけていた。

「なあに、大物だってウサギと同じさ」と、言い出したら絶対に引かない根性で、どでかい夢を追いかけ続けた。しかし、何も知らない単独猟人の悲しさで、英才教育で身につけた自信のヤマドリ猟やウサギ猟までも根本から見直すことになったのである。

目標にたどりつけない惜しさをはねのけ、どん底から這い上がるのは並みの努力や挑戦心でできることではない。

「なんとかせねば……」「必ずできる」と、父や兄たちに学んだプロ根性をむき出しに創意工夫した。

その改善の一番目は犬である。気を入れて、紀州犬がだめならビーグルに、少しスピードと迫力に欠けるのでプロットやブルーチックにと、良いと聞けば何でも取り入れ実戦の場で検証、良い結果は大切に残し積み重ねていくようにした。

その甲斐あって、ブルーチックの一流芸ができるまでになり、血統書もできたし、全国猪犬大会でも準優勝二回、三位一回の入賞犬まで作れるようになったが、一人で猪が簡単に獲れるような生やさしい世界ではなかった。

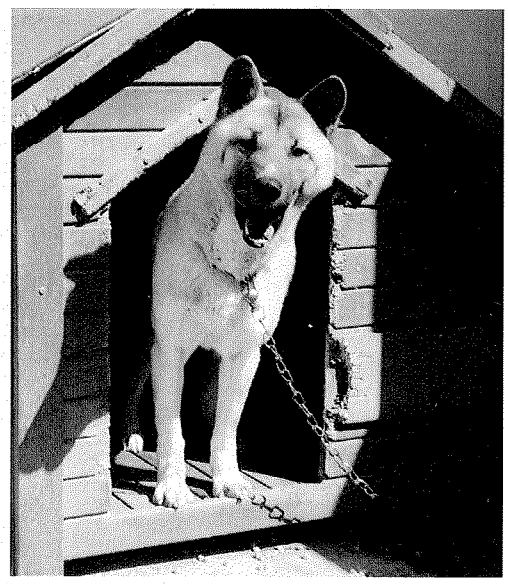
グループ猟ならば、素晴らしい犬群がぞろっと揃ったので、どの猟場でも「こんな素晴らしい犬を一人で使っているのか」と、グループ猟の方々に驚かれた。

今考えると当たり前のことで、私の猟自慢や自信はあくまでヤマドリ猟やウサギ猟であった。その延長線上で大物と戦っていたようなもので、追跡犬を単独で使役するなどは論外である。基本的にはヤマドリ猟でもウサギ猟でも、ほんの少し発想転換をするだけで同じようなものである。

ただ、大物は回ってくる範囲がウサギに比べ、とてつもなく広いだけである。追い切れる一流芸の追跡犬でも、若くて足が強いうちは十分楽しめるのであるが、単独猟の醍醐味は、なんといっても犬とコンビの止め撃ちである。たまたま止めたり、遠くに逃れる猪にチャンスを求めても、なかなか的確な勝負にならないのである。

それどころか一山、二山越えた先で止めたとしても、どうにもならないし、最悪の場合は獲物を横取りされたり、時には犬さえもやられるのである。私も何度もそんな無念な思いをさせられた。特に山梨県の十枚山で名犬チャカが姿を消し、何カ月も捜したがとうとう出てこなかった。

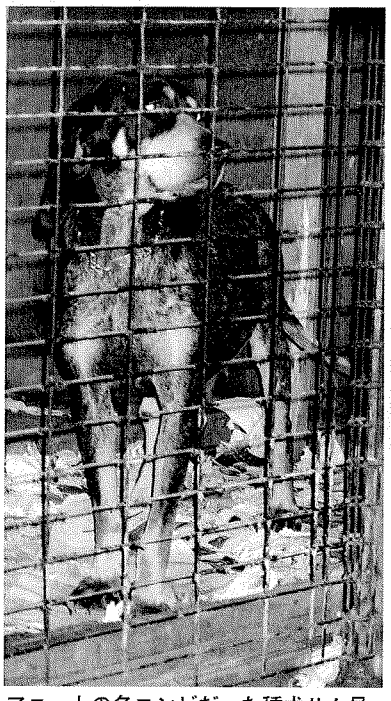
追跡犬は一流になると、まず戦って死ぬことなどはなくなるものである。それどころか、山の条件



ゴン助号直仔の富士号。めっぽう強く、他犬が心配な仔だった

全猟の猪犬大会三連勝の清水・宮本氏愛犬シュワ号直仔の千代号。鳴きは少なかったが猪には良かった

アニー号たちが止めた猪。和犬との犬群でも鳴き出すのは必ずアニー号だった（右がブル号、後ろが咲号）



アニーとの名コンビだった種犬サム号

名犬アニー号。何度喜びをもらったことか。素晴らしいの一言であった。その鳴き声が今でも残っている。良い仔もたくさん残してくれた

が良ければ猪も止められるし、必ず戻って来るもので、熊なども上手に木に上げるものである。

少しずつではあるが、鹿から猪に的を絞っていく中で、名犬アニー号が「さあ撃ってください」というように大猪を止めるようになってくれた。

このことを契機に、わが狩猟人生が大きく前進し「本物の猪猟」、つまり止め犬群を使っての「単独猪猟」の道を目標に突っ走ることになる。アニー号のお陰で、猪猟はきちっと止め切らないことには、思いどおりの撃ち込みなどできないことを知った。

そんな当たり前のことに気付くまでに何と苦労の多かったことか。しかし、それもこれもみなやってみて、やり遂げることで初めて分かる真実なのである。

猪の単独猟では、誰が何と言おうと、猪をきちっと止め置く一芸の勝れた犬群がどうしても必要である。何としても、止め芸にこだわった一流犬群を作ってみせる。そんな思いで「夢の命題」に人生をかけることになったのである。

好きで志した単独猪猟なのだから、使う犬は自分で作り、愛犬たちとともに必ず極め頂点に立ちたい。そのためには、やってきた実戦の体験をすべて打ち込み、万策をめぐらし、猪猟人でなければ絶対にできない一流猪犬群を作ることである。

現在の犬舎。日当たりと空気は最高だ。素晴らしい「一軍犬」が、ぞっくり育っている

その目標は、どこに出しても恥ずかしくない犬、つまりどんな猪でも一人で獲れ、その上安全で安心して猟ができる「名犬群」である。

当時の猪犬の多くは強すぎからくる危険で、他犬や家畜、時には人などまで考えると安心して猟ができないのがほとんどで、友犬とのケンカや鳴かない犬が実に多かった。猪の猟場が奥山であったうちは、それでも何とか使えたが、現在の猪のように生活が様変わりして民家周りに棲みつくようになったことから、とても対応できなくなったのである。

自分の猟法に合った猪犬を作るとは、おしなべてその辺のことであり、猪猟を実践してきた自身の目でよく見た上できちっと検証し、単独猪猟になくてはならない「止めの一芸」とか「鳴きの途切れない」ことなどの「必要芸」が思いどおりにできる猪犬に改良することであった。

どうしても既存犬では満足いかず、達成できなかった猪猟や猪犬を、あくまでも自分の猟に合ったものに進化させ完成させることである。既存犬や既存概念を大きく超える、一芸の優れた一流猪犬群を作ったという既成事実を構築したかったのである。

何事においても、新しい物を作ったり完成させるのには、気の遠くなる歳月と大変な努力が必要である。その上、物事を進化させ改良するとなると、思わぬ逆風や批判にさらされるのは世の常であるが、批判に耐えて失敗を恐れず、挑戦し続け、どうしても欲しい物、必要なものは創意工夫し、努力を重ね、必ず自分の手で摑み取ることである。

どんなに時代や環境が変ろうと猪猟は犬で決まるのであり、その醍醐味もまた猪犬次第となるからである。

（つづく）